

ホームランスター（半促成栽培）

地帯区分	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
I												□ ◇
II III												○~△ ~◎
IV												○△
主な作業 （I の場合）	交 配		摘 果		収 穫							播 種 鉢 上げ 定 植

技 術 栽 培

1 作型の特徴

ノーネット系メロンは低温伸長性が弱く、雌花着生不良、果形の乱れを生じやすい。したがって栽培にあたっては極端な早まきをさけるとともに温度確保に留意する。また、高温期に入ると草勢低下による急性萎ちょう症が発生しやすいため、高温期の栽培では草勢維持に努めねばならない。

2 適応地域

全域

3 栽培条件

- （1）光 メロンの光飽和点は6万ルクスといわれる。

4 施設装備

- （1）単棟型ハウス、連棟型ハウス
（2）2重トンネル

5 経営目標

- （1）収量 2.6 t / 10 a
（2）投下労働時間 800 時間 / 10 a
（3）所得率 40 %
（4）経営規模 50 a

（家族労働力2人の場合）

技 術 栽 培

2 品種特性

「ホームランスター」

白色系ハネデュー×緑色系ハネデューのF₁品種。中葉で節間が短く草勢は弱い、べと病、うどんこ病にはかなり強い。果肉は白色で糖度は安定している。果実は1～1.2 kgの大果種。果形はやや腰高、肉質は粘質である。熟期は37～43日程度であるが高温期には過熟になりやすいので注意する。

3 育苗

（1）播種量

播種期、仕立て法により播種量が異なるが2本仕立ての場合は、1,100粒、3本仕立ては800粒を基本にする。

（2）播種期

播種期は、気象タイプによる地帯区分、施設と被覆方法等によって決める。

地帯別の播種期は次のようになる。

タイプ	播種期
I	11月中旬～1月中旬
II III	12月中旬～2月上旬
IV	1月上旬～2月中旬

(3) 接ぎ木

ホームランスターメロンは自根栽培を基本とするが、つる割病発生の恐れがある圃場では接ぎ木栽培により回避する。この場合カボチャ台は接ぎ木不親和、品質低下、裂果等の発生があるので使用できない。台木としてはリキエース等の共台に接ぎ木する。

(4) 播種

播種は野菜専用育苗箱を利用し、本圃 10 a 当たり 5 箱を準備する。メロンの発芽適温は 28 ～ 30℃ である。播種後は昼間 30 ～ 33℃ で管理し、夜間は 25℃ が確保できるようサーモスタットを設定する。播種から発芽までの日数は 3 ～ 4 日であるから、発芽後は次第に温度を下げ、移植前は昼間 28 ～ 30℃ 床温 20℃ にする。

(5) 移植

鉢上げは直径 12 cm ポリポットを用い、子葉が八分から完全展開した時に行う。鉢上げは本圃でのつる枯病対策を考慮し、できる限り浅植えにし胚軸を鉢土の中に埋め込まない。

温度管理は活着までの 3 ～ 4 日間は 2 ～ 3℃ 高く管理し、昼間 30 ～ 33℃、夜間 22℃ を目標にする。活着後は昼間 28 ～ 30℃ とし、さらに夜間の温度は 5 日間隔で 2℃ 単位で下げ、定植の 2 ～ 3 日前には 12℃ 程度にし苗を硬化させる。

(6) 摘心

本葉の展開が 3 枚時に 2 本仕立ては 5 節、3 本仕立ては 6 節残して摘心する。

4 本圃の栽培管理

(1) 定植準備

施肥、畦たては早めに行う。ビニル被覆、マルチ張りトンネル準備は定植期が 12 月の場合は 15 日前、1 ～ 2 月の場合は 20 日前に張り、地表下 10cm の早朝地温が 15℃ に安定するようにする。

地温の上昇はマルチ張りの後の日数、気象条件とともに土壌の水分状態が関与する。土壌が乾燥していれば地温が上がらないため畦に十分散水した後にマルチを張る。

(2) 施肥

メロン類は品種間で吸肥量が異なる。ホームラン

スターのようなノーネット系は一般にネット系メロンに比べ吸肥量が少ない品種が多い。特に、ホームランスターは多肥栽培をすると、果形の乱れ、果皮の色抜け不良、裂果等が発生しやすい。

施肥に当たっては前作の残存量、土壌の種類等を考慮して決定するが、前作の残存量が無い場合は下記の基準により施肥する。

施肥量		(K g / 10 a)		
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	備考
基肥	10	12	10	粘質水田土壌では減肥する。 基肥中心にし追肥は原則として行わない。

(3) 定植

育苗日数は 35 ～ 38 日とし、苗令は展開葉 3.5 ～ 4.5 枚である。

定植は晴天日を選び植え傷みのないように植える。植えつける深さは生育後半の地際部のつる枯病対策を考慮し、根鉢部の八分目位のところまで土を寄せる。

定植後は株元を中心に 2 ～ 3 回灌水する。

(4) 栽植密度

標準栽植密度

本数	畦幅	株間	10 a 当り株数
2 本	2.5 m	40cm	1000 株
	2.7 m	38cm	970 株
3 本	2.5 m	60cm	670 株
	2.7 m	55cm	670 株

(5) 温度管理

低温期の無加温栽培では昼間の温度をいかに逃さず保温するかが、生育を順調に行わせるポイントになる。一般にハウスメロンは低温に弱く、地温は 15℃ 以上、最低気温は 13℃ 以上なければ順調な生育は望めない。したがって、ハウス装備は 13℃ 以上の温度が確保できるようにする。

【定植直後】

定植後は 4 ～ 5 日は 32 ～ 35℃ と高く管理し活着を促進する。35℃ を越えるときにはトンネルを開

け温度を下げる。

【生育期】

活着後は昼間の最高気温 28～30℃とし、午前中は 28℃を確保し、午後は 25℃が維持できるようハウスの開閉度により調節する。トンネルは 23℃に下がったら被覆する。最低気温は 13℃を確保する。

【定植から果実肥大期】

交配期から着果後 25 日程度は、午前中 30～32℃、午後 26～27℃を維持し、最低気温は 15℃を確保し果実肥大を助長する。

【成熟期】

着果後 30 日を経過すると、果実肥大がほぼ終了するから管理温度を下げていく。午前中は 26℃、午後 23℃を維持温度とし換気を強める。夜間は最低気温を下げすぎると発酵果、裂果の発生があるから 15℃を確保する。

（6）整枝と着果節位

着果節位は順調な生育状況であれば 8～11 節の範囲で結果枝を選定する。結果枝以下の側枝はすべて摘み取る。結果枝は 1～2 節残して摘心。結果枝から上位の側枝は草勢維持の目的で 1 葉残して摘心する。これから出る側枝、つまりひ孫づるは発生の度合いにより整枝で調節する。

主枝は着果節位の上に本葉 8～10 枚を残して摘心する。

（7）灌水管理

定植時の土壤水分状態は pF 2.0 程度とする。定植後は鉢の回りに 2～3 回灌水する。定植 4～5 日後、早朝葉に露が見られたら灌水を止める。以後、土壤の水分保持力にもよるが、一般的には着果期まで灌水しない。低温期に土壤水分過剰の状態では生育すると、生育が旺盛になりすぎ、縦伸びが強くなり、いわゆる腰高果になりやすい。他方、高温期の多水分管理は、根の伸長に対して茎葉の伸びが旺盛になり、収穫前に萎ちょうを生じやすい。

着果を確認したら灌水を開始するネットメロンと異なり、果実硬化が少ないため、着果から定期的に灌水を行い果実肥大を促進する。

着果から 30 日以降は土壤を乾燥させていく。収穫が 5 月下旬以降になる場合は、土壤の極端な乾燥

は草勢低下につながるから、収穫期まで少量の土壤水分を維持する。

（8）交配

一斉着果に努め、交配日の印をつける。

（9）摘果と着果数

摘果は交配から 5～6 日後で果実が鶏卵大になった頃に行く。果実の異常の有無を確認するとともに、このころは縦伸びする時期であるから、正形のものよりやや縦伸びしたものを残す。

着果数は収穫期により調整し着果過多を避ける。収穫期と着果数の目安は次のとおりとする。

収穫期と着果数の目安

収穫期	仕立て本数	株当たり着果数
4 月中旬	2 本仕立て	2～3 個
	3 本仕立て	3～4 個
4 月下旬	2 本仕立て	3～4 個
	3 本仕立て	4～5 個
5 月中旬	2 本仕立て	4 個
以降	3 本仕立て	5～6 個

（10）仕上げ期の管理

収穫にあたっては、品種特有の果皮色の色上がり、果肉の熟度、糖度の三つが揃わねばならない。5 月上旬までは低温により果皮の色抜けが悪く、以後は果皮の色抜け、果肉の成熟に対して糖度ののりが悪い場合が多い。このようなことを考慮し、5 月上旬までは温度を高めを保ち、土壤を乾燥させる管理を行う。他方、5 月中旬以降は成熟期には換気につとめ、土壤は極端に乾燥させないようにする。

（11）収穫

交配後 37～43 日で収穫になる。

着果から収穫までの日数

収 穫 期	日 数
4 月上～中旬	42～43 日
4 月下～5 月中旬	40～42 日
5 月中旬～	37～40 日